

知事対談

秋竹 新吾 × 宮崎 泉

株式会社早和果樹園会長

和歌山県知事



有田みかんから広がる地域と人を繋ぐ力が 和歌山県の発展を支えていく

和歌山県農業のブランド力強化や若者の就農促進、こどもと地域の関わりづくりなど、地域の未来を見据えた活動が続ける地域づくりの第一線で活躍する実践者に展望を聞いた。

宮崎知事（以下宮崎）◆秋竹さんが会長を務める早和果樹園は2000年に設立され、有田地域特産の温州みかん「有田みかん」を栽培しているらしいやいます。私自身も長くその活躍を拝見してまいりました。

秋竹新吾（以下秋竹）●みかん栽培に携わり60年余りになりますが、これまで「みかん」一筋に生きてきました。まさに「みかん色」の人生でした（笑）。振り返ると、2000年に法人化したことが大きなターニングポイントでした。それまでは生産一筋でしたが、加工や販売にも挑戦するようになったんです。現在は生産（一次産業）だけでなく、



糖度12度ある「味いしぼり」は濃厚なみかんの味わい。

く、加工（二次産業）から販売（三次産業）の全てに携わる「六次産業化」に取り組んでいます。当時はまだそんな言葉も広まっていなくて、まさに手探りの状態でした。世の中では濃縮還元ジュースが主流でしたが、どうしてもストレートジュースにこだわりたいと考えていました。美味しいみかんを育てることには自信があったので、その強みをジュースにも活かしたいと考え、思い切って糖度12度以上の有田みかんだけを厳選して搾ってみました。ようとなつたんです。試飲していただいた百貨店のバイヤーさんや有名なホテルの料理長さんから「こんなジュースは初めてだ」と絶賛していただきました。その一方で、今度はこの商品をどうやって売っていくかという壁にぶつかることになりました。

宮崎◆これまでにない新しい商品を販売する際には、最初はなかなか受け入れられないこともありますよね。どのように商品の魅力を伝えていかれたのでしょうか。

秋竹●どうしても値段が高いことがネックでしたが、ある時、観光地で販売したら本当にたくさんの方が手に取ってくださって。販売するターゲットはここだ！と感じました。また、とにかく一度飲んでもらおうと年間65万人のお客様と向き合い続けてきました。PR効果もそうですが、そこでお客様との結びつきも生まれ、自信にも繋がったんだと思います。

和歌山県全体の発展を支える一次産業

宮崎◆和歌山県にとって一次産業はまさに基幹産業であり、その発展



早和果樹園本社内にある店舗ではジュースの販売や試飲を行う。

なくして県全体の発展もないと考えています。ただ一方で、担い手不足や高齢化といった課題も深刻です。ブランド化や新しい販路開拓といった取り組みは、若い世代が就農しやすい環境作りにも繋がりと感じました。早和果樹園ではICTやドローンを早くから取り入れていると伺いました。

秋竹●今は全国の農業者の7割以上を65歳以上の高齢者が占めている時代です。有田地域でも団塊世代が引退すれば担い手が一気に減ってしまうと予想されるので、後継者



知事対談

秋竹 新吾 × 宮崎 泉

人が産地へ訪れる 工夫を凝らす

問題は早くから対策を考える必要があると思いました。どの仕事にも共通することかもしれませんが、みかん作りも就農していきなり一人前の仕事ができるかというと、なかなかそうはいきません。技術を身に付けるまでに10年ほどかかると言われています。そこで、私たちの経験や知識をICTでデータとして集約し、振り返りができる形にまとめておくことで、習得までの時間を短縮できるのではないかと考えました。

宮崎◆新しくオープンしたカフェ「果汁と果実」ですが、とても明るい雰囲気で、若い方が本場にたくさんいらつしゃってましたね。秋竹さんはこのお店にどのような思いを込められているのですか。

秋竹●やはり一番の思いは、みかんを直接販売できる場所が欲しいとい

うことでした。京阪神から来られるお客様も多く、「生のみかんが欲しい」という声に応えることができて本当に良かったと思っています。今は若い社員がSNSでの発信を積極的に行ってくれているので、現地まで直接お越しくださる方が多く、私自身も驚いています。夏場はみかんがないため、パフェなどのスイーツや加工品を中心に販売しています。実際にみかんの産地を訪れていただき、現場で手に取ってもらえる、そんな場所を目指しているところです。

宮崎◆新しい分野に挑戦される姿勢や、若い人たちが働きやすい環境づくりへの思いが強く伝わってきます。

早和果樹園には遠方からのお客様だけでなく、地元の小学生もたくさん訪れているそうですね。

秋竹●小学校の社会見学で来てくれるんです。ふるさと教育の一環として、地元の特産物を学ぶ取り組みをしてくださっていて、県内各地の小学校から多くの子どもたちが見学に來ています。いただいた感想は廊下いっぱいに掲示させてもらっています。選果場が手狭だったこともあり、カフェの隣に新しい選果場を整備し

ました。地元の子どもたちが見学しやすいように配慮もしています。

食をきっかけに 自然な交流を

宮崎◆新しく社員食堂「なでしこ食堂」をオープンされました。どのような思いで始められましたか。

秋竹●なでしこ食堂は、創業時から支えてくれている女性たち7名が中心となり、「株式会社早和なでしこ」を立ち上げて運営してくれています。早和果樹園には100名ほどの従業員がいますが、そのうち約4割が20代で、地元出身者だけでなく県外から来てくれている人も多いんです。一人暮らしをしている従業員の食生活を見ていると、この地域は飲食店が多くないこともあり、どうしてもコンビニ弁当やインスタント食品中心になりがちなのが気になりました。せめて1日3食のうち1食だけでも健康的なごはんを食べてもらいたいという思いから始めました。従業員にはやはり健康で元気に働いてもらいたいですからね。また、食堂は普段顔を合わせない社員同

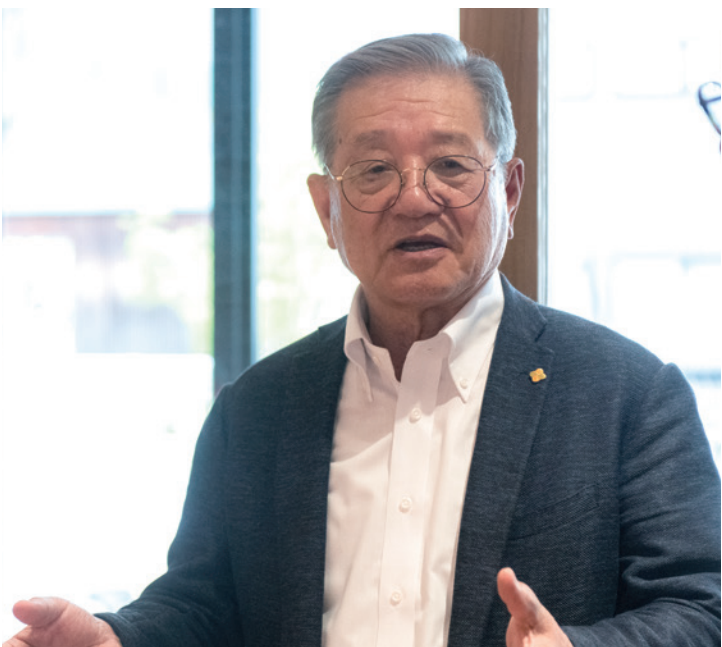
士のコミュニケーションの場にもなっているんですよ。

宮崎◆社員の皆さんにとっては、本当にありがたいことだと思います。さらに今年からは社員専用食堂の調理場を利用して、こども食堂「みんなのなでしこ食堂」を始められました。

秋竹●以前から会社として地域貢献に取り組みたいと考えており、具体的なアイデアを検討していく中で、こども食堂をやってみようという準備をしてきました。スタッフは自ら志望してくれたボランティアだけで構成されていて、

今は15人ほどが活動してくれています。また、社会福祉協議会の方々にも協力していただけることになり、地域の方々と力を合わせながら、運営を続けていきたいと考えています。こども食堂の開催をSNSで告知すると、先着50名があつという間に満員になって、その盛況ぶりがとても嬉しく、やりがいを感じています。

宮崎◆本場に素晴らしい取り組みだと思えます。和歌山県としても、全ての小学校区にこども食堂を設置することを目標に掲げており、今



秋竹 新吾 Akitake Shingo

1944年和歌山県有田市生まれ。県立吉備高校（現有田中央高校）柑橘園芸科を卒業後、実家の果樹園を継承して就農。1979年、7戸のみかん農家が集まり早和撰を創業。2000年に法人化。2005年に株式会社早和果樹園へと改組して社長に就任。2014年、6次産業化優良事例で農林水産大臣賞を受賞。2017年、会長に就任。旭日単光章受章。

年7月末の時点で131ヶ所が開設

されています。地元のこども食堂を応援する企業は着実に増えてきていますが、企業自らが主体となって運営するケースはまだ少ないのが現状です。そうした中で、秋竹さんの取り組みは大変心強く、ありがたく思っています。今後は「みんなのなでしこ食堂」をどのような形に発展させていきたいとお考えでしょうか。

秋竹●若い世代の人たちがボランティアで積極的に活動してくれている姿を見ると、本当に嬉しく思います。地域の皆さんがこの食堂に来てくだされば、食事をきっかけに自然と交流が深まり、仲良くなれるのではないかと感じています。地元の方々が集い、みかんとともに良い形で広がっていつてくれたら”そんな思いを持っています。

宮崎◆こども食堂の活動は単に食事を提供するだけでなく、こどもたちが地域の方々と交流できる居場所づくりにも繋がっていると考えています。和歌山のこどもたちが地域で健やかに成長し、一人ひとりの個性を生かして活躍できる社会を、県全体



まだ青いみかんは、これから冬にかけて色づいてゆく。

